

春の大セミナー2016 5th C テーブル 総評

ジャッジ：藤原・城倉

テーブルメンバー：大沼（フェリス2）、村上（早稲田2）、今坂（明治2）、山口（青学2）、遠藤（慶應2）、野澤（青学3）、駒谷（青学2）

※ここに書いてあることはすべてジャッジ目線でそう見えたことを書いているのでテーブルの理解とは多少異なる可能性もありますが、ご了承下さい。

1、議論の流れ（文書：藤原）

<Narrowing>

大沼のナローによりディスカッションが始まる。おプレには大沼のみが立候補したのでおプレは大沼に決まる。

<ASQ>

よくあるコンパリソンのアイディアなどを聞く質問がいくつか出るが特に何もなく終わる。

<NFC>

NFC では村上と今坂がワラントへの反論を提示する。

村上の反論は現状で多くのJNが臓器移植に反対しているからタッチすべきではないというアイディアだった。大沼のワラントに対する質問により村上のアイディアはその反対する多くの人がSMするからNFCはないというものである。それに対して、APAのことはAPA出話そうという提案を今坂がしたのに対し、村上がデータの反論を受け付けてないことを理由にワラントで話そうという提案をし、これを今坂が受け入れる。ワラントに移り、村上が大沼も同じようなSを出そうとしていたと思ったのか、大沼と今坂両者のSの内容を確認したいといい、2人がSを提示した結果、今坂のコンパリで話そうというSを受け入れこの話はコンパリで話すことになる。

今坂は医療の目的（＝“脳死者を助けること”と今坂は定義していた）に反するためタッチすべきではないというアイディアを出した。内容を理解する質問がいくつか出た後、村上がデータに対するダウトを出そうとするも結局それは今坂と村上の中での”助ける”の定義の違いによるものと判明し、村上はダウトを下げる。その後大沼のQにより医療の目的に反するのはプランを取った後であると判明し、それならばプランを確認した後に話そうという大沼の提案によりDAとして話すことになる。

<Solution>

Solution では practicability で村上と遠藤の二人が提示する

村上のはベースは NFC で出したアイディアだが理由が SM ではなく憲法を変えるには 2/3 の JN の賛成が必要というものだった。これはおブレのプランが憲法違反であるという前提がもとにあるため、野澤が憲法のどの条文に違反しているのかの説明がないと立証できないという指摘をし、村上がそれについてアイディアを持っていなかったため。子のロジックは立たないこととなった。

遠藤はプランは生存権に反するから実行性ないという反論を提示する。生存権とは何かなどの質問が出た後、大沼によって現状でも脳死者がドナーになるかどうかの意思を表示していないというエクセプションを提示する。遠藤はこれに対し、そのような現状にそもそも問題があるとゴールをチェンジマンデーとに変える。しかし、結局どのように変えるか思いつかず、自らアイディアを下げる。

<Comparison>

DA には今坂の脳死者家族が選ばれ、残り 40 分ほど残し、コンパリへ突入。

大沼の提示した AD>DA アイディアは病気の人の方が病気でない人より SM が上がるため QL が高いというアイディアだった (tendency) 野澤のハンドリングにより AD,DA で SM のそもそもの最大値が違うから最大値を使ってコンパリしようということになる

(impact)、大沼がロジックを自分の死のほうか他の人の死よりもつらいと書き換えた。これに対して村上の term 反論があるという発言をするも野澤の impact が終わってから話そうという提案により後回しになる。その後野澤のカンファメーションにより大沼のアイディアは SM が物理的なものか精神的なものかというものであると判明する。その後駒谷が impact で反論があるという発言をし、野澤のハンドリングにより一時検証することになるも野澤のカンファメーションにより、結局これもロジックのデータやワラントを直接否定するものではなく逆のプライオリティも立つというものであることがわかり、おブレの元々のロジックが立ったら検証しようということになる。そして誰も反論を出さなかったため、おブレのロジックが立論される。その後逆のプライオリティとしての駒谷のロジックを検証しようとしたところでディスカッションが終了した。

2、全体に対してのコメント（文書：藤原）

<テーブルの雰囲気>

雰囲気としては全員が話を聞く姿勢を持ちいい雰囲気だと感じた。しかし、ほぼ 2 年生だったからかコンパリに行ってからハンドリングをほぼすべて野澤に任せてしまい、誰もそれにダウトを示すものがいなかったのが残念。

＜アーギュメントに関して＞

アーギュメントを出すものが数人いたが、どのアーギュメントもよく出る反論やSで切られたり、流されたり、そもそもエビデンスが不十分だったり、詰まっていない印象を受けた。また、全員に言えることだが出した後は自分で議事進行せず、質問に答えるだけ（いわゆるアンサーマシーン）になってしまっていた。アーギュメントはただ出すだけではあまり意味がないので出した後来るであろう反論などを予測してそれに対する反論や他のパントのダウトを自分のアーギュに組み込んだトーキングポイントを柔軟にひけるようなケースをしておくことをお勧めする（やり方わからなければ聞いてください）。

＜コンパリに関して＞

コンパリでは、アイディアを提示する側は“何と何を”と“どういった基準で”を明確に伝えることが立証するために必要である。今回であれば大沼はそれを自分だけで説明できず、野澤のカンファメーションに頼ってしまっていたり、ハンドリングを野澤に任せてしまっていたのが停滞を生んだ原因であることを理解してほしい。また、野澤も 1by1 で話そうという意識はよかったが、それをトーキングポイントとしてチャートにまとめなかったために、地に足がついた議論に持って行けず、同じようなSを打たなければならなかったり、ロジックが出て検証しようという流れになってから後回しにしたりなど無駄が多くなってしまい、時間を多く費やしてしまったこと、そして結果的に大沼の元々のアイディアである tendency を無視してしまったことは少し残念である。また、他のパントも野澤のハンドリングになんとなく先輩が言ってるから乗るのではなく、それが正しいのか、足りない役割はないか考える必要があったと思われる。また、physical と mental はどういった基準で判断されるのか、physical と mental はなぜ physical のほうが強いのかなどといったところに疑問を呈すものがいてもよかったのではないかと感じた。

3、順位と選定理由（文書：城倉）

1 位 大沼（フェリス2）

OP として話の取捨選択、argument に対しての Q でのアプローチなどを高く評価しました。しかし、コンパリの際に自分のアイデアにも関わらず、ハンドリングを野澤に頼ってしまったところは残念でしたが、まだまだ2年生。これからースをやって経験を増やし、ジャッジ陣も含めテーブル全体を和ませたアトモスの良さを武器にこれから頑張れ！

2 位 野澤（青学3）

ASQ、APA での介入はほとんど見られなかったが、コンパリでの貢献度を評価しこの順位に選定しました。コンパリ以外での介入をもっと増やせば1位を取れたかもしれません。これはあくまで個人的な意見だが、野澤は気分の浮き沈みで介入量が変化するように思わ

れる。正直、自分もそういう側面があったからわかるが、そういう時最高学年として、また後輩のために何ができるか？何をすべきか？などを考え競技ディスカッションに挑んで欲しい。これからの飛躍に期待しています。

3位 今坂（明治2）

argument での介入を中心にテーブルに貢献していました。まず、argument としてのゴールの設定や、QA など基本技術はできているように感じました。しかし、やはり介入量が1、2位と比べて、少なかったです。まだまだ2年生なのでCなどの練習はたくさんできます。そして、介入量が増えればPDDがもっと楽しく感じて来ると思います。Assemblyでの成長を期待しています。

4位 村上（早稲田2）

argument での介入を中心にテーブルに貢献していました。evidence もしっかりと用意され、準備してきている良い印象を受けました。早稲田にも良い先輩がたくさんいると思うのでArgumentの介入にとどまらず、CやSなどにも手を広げ、これからも頑張ってください～

5位 駒谷（青学2）

Q、そしてコンパリでのdoubtによってテーブルに貢献していました。コンパリでは惜しかった。野澤パイセンのロンプレさえなければ、アイデアが考察されたのにね…笑。でも、まだまだ2年生。自分の良さ、強みを使ってこれから頑張れ！

6位 山口（青学2）

Qを中心にテーブルに貢献していました。特にArgumentで視点は良かったです。しかし、そこからSを掲示できればなあという印象を強く受けました。伸びしろはまだまだあります。これから頑張れ！

7位 遠藤（慶應2）

Q また Argument を中心にテーブルに貢献していました。しかし、浸透率がイマイチかなあという印象を受けました。地頭の良さを活かしてこれからは相手に一発で浸透する伝え方なども意識してやってみよう！